

平成 25 年度

### 1 自己評価及び第三者評価結果

**【事業所概要(事業所記入)】**

事業所番号	2870501224		
法人名	社会福祉法人 光朔会		
事業所名	グループホーム オリンピア兵庫		
所在地	兵庫県神戸市兵庫区小松通5丁目1-14		
自己評価作成日	2013年12月1日	評価結果市町村受理日	平成26年3月28日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigo-kouhyou-hyogo.jp/kaigosip/Top.do">http://www.kaigo-kouhyou-hyogo.jp/kaigosip/Top.do</a>
----------	---

**【評価機関概要(評価機関記入)】**

評価機関名	株式会社 H.R.コーポレーション		
所在地	兵庫県西宮市松風町2-5-107		
訪問調査日	平成26年1月27日		

**【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】**

「認知症になっても、誇りを持ってこれまでどおりの暮らしを安心して続けていただくお手伝い」を理念に掲げ、利用者ひとりひとりの「その人らしさ」を大切に、パーソンセンタードケアを提供している。家庭的な環境の中で、利用者のこれまでの人生をよく知り、グループの持つ力を活用することにより、残された能力や可能性を最大限に引き出すケアを行っている。また、デイサービス、ショートステイ、ヘルパーステーション、居宅介護支援事業所を併設し、住み慣れた地域で継続的にケアを受けることができる、小規模多機能ホームであることも大きな特徴である。地域に開かれたコミュニティカフェ「Cafe Olympia」を併設し、地域住民とともにSalon de l'Olympia(コンサート・落語会等)や「オリンピア福祉塾講座」を開催するなど、地域との協働も多い。さらに、スウェーデンをはじめとする国内外からの見学・実習の受け入れや、大阪大学大学院などの研究機関と共同研究を実施するなど、認知症ケアの発展にも力を注いでいる。

**【第三者評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】**

入居者の尊厳・誇りやプライバシーを大切に「その人らしさ」を大切に、パーソンセンタードケアを提供している。入居者のADLの低下があり車椅子利用の方が多くなっているが、外出の際には、入居者が車椅子を押し、車椅子の利用者であっても外出の機会が減ることなく、入居者が地域と関わりを持ち暮らし続けることができるように支援している。大人数で出掛ける機会があれば、少人数で入居者の希望に合わせて外出・旅行に出かける機会も多く持てるように支援している。入居者の馴染みの場所や懐かしい場所への外出や旅行なども個別の支援を行っている。協力医療機関からの往診看護師が配置されており、入居者の些細な変化を見逃さないように観察に努めており、入居者の疾患・健康の管理が徹底して行われている。

**V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します**

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目：23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目：9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目：18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目：2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目：38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目：4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目：36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目：11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目：49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目：30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目：28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

### 自己評価および第三者評価結果

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	利用者ひとりひとりの「その人らしい暮らし」を支えるオリンピア兵庫の理念、そして理念の実践のための3つの約束を作成し、毎日の朝礼、毎月のカンファレンス、内部研修等を通じ、全スタッフで共有、実践をしている。	理念について特に話し合うという機会を持つのではなく、毎月のカンファレンスで利用者一人ひとりの支援を検討する中で、理念を具体化し実践している。各ユニット毎に理念に基づいたビジョン(運営方針)を掲げ、理念の実践をより具体的に表し職員が認識実践し、振り返りを行い達成状況に応じて次年度に反映させ理念に基づいた不変的なケアを継続している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	日々の外出、買い物等、「地域で暮らす」ことによる地域交流を図るとともに、祭りへの出店や勉強会の開催をしたり、地域住民と共同でSalon de l'Olympia(コンサート等のイベント)を開催するなど、日常的な交流を行っている。	入居者のADLの低下はあるが、今まで以上に近隣への買い物や外出の機会を持つように取り組みを継続して、入居者が地域と関わりを持ち暮らし続けることができるように支援している。入居者と一緒にホットドッグの朝の販売も継続している。ランチも地域に浸透し来訪してもらえる機会が多く持っている。車椅子利用の方が多くなっているが、外出の際には、入居者が車椅子を押し、車椅子の利用者であっても外出の機会が減ることなく支援することができている。Salon de l'Olympiaの活動を通しての地域住民との交流の機会だけでなく、日常的な地域住民との交流が継続的に行えるようになっている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	「オリンピア福祉塾講座」等の勉強会を開催したり、地域の認知症に関する相談に乗るなど、現場での経験を共有している。また、館長が神戸市認知症介護サービス研修の講師を務めたり、地域での講演活動も積極的に行っている。		

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
4	(3) ○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では、写真やビデオ等を利用し各ユニットの日々の生活や行事の様子を紹介したり、質向上のための話し合いをしている。出された意見はユニットで共有し、サービス向上に取り組んでいる。入居者も数多く参加している。	運営推進会議は、偶数月に実施している。行政書士(社会福祉士であり知見を有する)の方、民生委員、地域包括支援センター職員、入居者(各ユニットから3名)、家族の方の出席がある。入居者の方も参加を楽しみにしている。参加メンバーより意見や提案などが出され、運営に反映させるように取り組んでいる。また、グループホームを見て気づきや意見をもらい質向上に役立っている。	
5	(4) ○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市担当者とは日常的に情報交換を行い、協力関係を築いている。また、館長が市の研修で講師を務めたり、市担当者からの依頼で国内外からの見学・実習を受け入れたりもしている。	館長が認知症介護サービス研修の講師を務めたり、市からの依頼で見学や実習の受け入れを行ったりと日常的に情報交換・連携が図ることができている。	
6	(5) ○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束廃止の理念をトップを含め全職員が共有するとともに、身体拘束廃止マニュアルの作成し、研修を実施している。特に新入職員へは、ひとつひとつの具体的なケアのあり方を丁寧に説明・指導するようにしている。また、玄関のドアは日中施錠せず自由に出入りができるほか、心理的なロックをかけないように取り組んでいる。	身体拘束廃止の理念を全職員で共有している。身体拘束廃止に向けた研修は全員が受講できるようにしている。職員の有志が集まり法人内でパーソンセンタードケアについて学ぶ中でも拘束をしないケアについて触れて話し合い、検討を行う機会を持っている。各ユニットで実施されているカンファレンスの機会にも拘束をしないケアについて職員から気づきや意見が出され話し合いがもたれており、全職員で拘束をしないケアの実践が徹底されている。ことばによる拘束についても1年の中で何度も上がるテーマであり、日々注意をして取り組んでいる。	

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内の虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止に関する研修を定期的実施し、虐待の定義や高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を設けている。また、日々のケアにおいても、虐待につながりそうな危険がないか、常に注意し、話し合う機会を設けている。	高齢者虐待防止についても年間の研修計画で定期的に学ぶ機会を持っている。入居者や家族との関係の中で虐待と捉えられることがある為職員の理解を深め個別の支援で防止の徹底を図っている。	
8	(7)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護に関する制度の理解と活用について研修を行い、管理者や職員が知識を深める場を設けている。また、必要と思われる利用者については、関係機関への橋渡しを早急に行っている。	行政書士の方に講師として来訪してもらい制度についての理解を深めるように取り組んでいる。制度を利用している方もあり制度活用によるメリットについても理解している。制度利用の必要性がある利用者には手続きを円滑に進めることができるように適切な支援、取り次ぎを行うようにしている。制度利用をするようになり、後見人の方が中心となり家族との連絡や調整を行ってもらえるようになり、家族の来訪が増えたケースがある。	
9	(8)	○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の締結、解約、改定の際には、利用者や家族の立場に立って、十分に理解してもらえるように説明を行っている。家族への説明の場にはリーダーも参加し、現場からの声を伝えるように努めている。また、疑問点に関しては速やかに解決できるよう、対応している。	館長・管理者が契約を行っている。病院へ出向いて契約説明する際にもリーダーも入り、現場の部分からの説明を行い、利用・サービスに関して入居者・家族が理解してもらいやすように配慮されている。疑問や質問には速やかに答えるようにし、十分に納得を得て利用してもらえるようにしている。	

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(9)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	年に1度ご家族懇談会を開催するほか、家族も含めた食事会等の行事、運営推進会議など、意見・要望を聞く機会を数多く設けている。出された意見・要望は職員で共有し、速やかに運営に反映させるよう取り組んでいる。	年1回家族懇談会を開催し意見聴取を行う機会を持つ他、家族と上手くコミュニケーションをとるために連絡を密に取り、内容の記録を職員間で情報共有し、意見や要望等を言い出しやすい関係の構築を図っている。運営推進会議でも意見・要望を聴取するようにしている。年1回の利用者の誕生会を家族の来訪に合わせて行い、家族からの意見や要望を聴取するように取り組んでいる。「苦情・相談受付表」を作成し聴取・出された意見や要望・相談を書面で情報共有すると共に検討を行い、出された意見や要望・相談に速やかに対応している。結果も明記されている。	
11	(10)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	館長がリーダーおよび全スタッフ対象に定期的に面談を行っているほか、食事会を催すなど、日常的に職員が意見や提案をしやすい関係性を築いている。また、法人全体として、職員の提案を積極的に採用する方針を定めている。	ミーティング・カンファレンスの開催前には職員からの意見や提案を聴取し、サービスや運営に反映させるようにしている。館長が全スタッフ対象に定期的に面談を行い、直接、意見や提案、相談を行う機会も持っている。職員が意見や提案・相談が行いやすいようにコミュニケーションを十分に取り合える職場環境を整えている。 ミーティングとカンファレンスの違いを明確にして、会議の開催については、必要最低限の時間を設定し、会議開催までに意見の集約や調整を行い、効率良く話し合い、結果や対応が明確になるように取り組んでいる。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員ひとりひとりが毎年目標を設定し、それに対する自己評価および上司による評価を実施することによって、向上心をもって働ける環境を整備している。		

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人の事業目標として「質の高い人材の育成」をかけた、職員ひとりひとりに必要とされる技能や知識を把握し、それぞれの段階に応じた研修やトレーニングの機会を積極的に提供している。年1回の海外研修も実施している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	法人内外の施設や同業者との交流を通じ、サービスの質を向上させるように取り組んでいる。また、他施設からの見学・実習の受け入れも積極的に行う他、パブリシティやシンポジウム等を通しての情報発信も積極的に行っている。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービス導入段階においても、パーソン・センタード・ケアの理論に基づき、本人の立場に立って、困っていることや不安・要望に耳を傾けている。さらにその情報をユニットのスタッフ全員で共有することによって安心できるケアの実践に努めている。特に、入居からの一定期間は、日々の詳細な生活の様子をスタッフ間で共有できるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居までに、利用者本人や家族と面談をしたり、訪問してもらう機会をつくったりし、信頼関係を構築し、不安や疑問を取り去った上でサービスの導入を行うようにしている。		

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と家族がいま置かれる状況を的確に把握し、その時に必要としていることを支援するようにしている。必要に応じて、法人内外の他のサービスや機関への橋渡しも行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	パーソンセンタードケア・オリンピアの理念のもと、お互いが必要とし、支え合い、向上することができるような関係性の構築に努めている。スタッフは一方的にケアを行うのではなく、人と人との関係性の中で、共に暮らしをつくることを大切にしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	職員は、本人と家族の関係の深さを理解し、「家族にしかできないこと」を活かしながらケアを行うように努めている。常に家族と密に情報交換を行い、共にケアをつくりあげていくように取り組んでいる。		
20	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	利用者ひとりひとりのこれまでの人生をよく知り、日々の電話や外出を支援するほか、ご家族の協力も得ながら、馴染みの人との面会や、思い出の場所への訪問を支援するなど、これまで大切にしてきた関係性を途切れさせないように努めている。	近隣の商店への買い物や散歩で交流が継続できるようにしている。馴染みの人の来訪も継続されている。入居者一人ひとりの馴染みの人や場所をパーソンセンタードケアで把握し、懐かしい場所や店に出向いて交流を行っている。夢プロジェクトで入居者の声を実現するように、入居者の把握できた思いや意向を支援している。	

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者ひとりひとりの状況やその関係性を常に把握し、利用者同士が関わり合えるように、職員はグループ・ダイナミックスを利用しながら間に入り、支援をしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	自宅に戻るため、あるいは長期入院のために退去した利用者とも必要に応じて連絡を取り、必要な支援を提供している。またそのご家族ともイベント等を通じて交流を継続している。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者ひとりひとりのことをよく知り、日常の会話での何気ない希望や要望を大切にすることにより、思いや希望を常に把握し、日々のケアに活かしている。困難であっても、非言語コミュニケーションやご家族・知人等のご協力によって、利用者本人を中心とした意向の把握に努めている。	入居者の何気ない言葉や表情、テレビを見て出た言葉からの思いや意向を把握し、夢プロジェクトの中で思いや意向が実現できるように支援している。また、家族の協力と支援を受け、入居者自らの思いや意向を把握するように努めている。日々のケアの中で把握できた入居者の思いや意向・希望をカンファレンス・申し送りで情報共有するようにしている。入居者の思いや意向を「入居者様情報ファイル」「申し送りケアノート」へ記載し把握・共有に努めている。 大きい声が出るのは、不満があるからだけではなく、何か言いたいことがあるから、と捉え・見方を変えることで入居者の思いや意向を偏った考えで判断しないようにしている。	



自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24	○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用者本人や家族の協力によって、ひとりひとりの個人史を把握しているほか、嗜好や生活環境についても、本人や家族から詳細な情報を得るように努めている。また、得られた情報は全スタッフで共有し、日々のケアに生かすようにしている。		
25	○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者ひとりひとりの日々の状態、残されている力を、偏見や思い込みにとらわれないように、常に新たな視点で把握するように努めている。特に、変化した点については、専用のシートを活用し、小さなことであっても職員間で情報共有を行うように取り組んでいる。		
26	(13) ○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者本人や家族の希望やアイデア、そして職員の日々の気づきを介護計画に積極的に反映させるように、ご本人、ご家族、スタッフ、かかりつけ医を含めたチームでアプローチしている。また、日々のカンファレンスや毎月のユニットカンファレンスにおいてモニタリングを実施し、現状に即した介護計画を作成・実践している。	月1回のユニットカンファレンスで入居者・家族の希望や思い、職員の日々の関わりでの気づきや意見を介護計画に反映させている。サービス内容に沿って毎月アセスメント(モニタリング)を実施している。ワーカー日誌に入居者の日々の状況や状態、支援内容が明記され、ワーカー日誌に明記された内容は入居者個々の個別記録に転記されている。	
27	○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	利用者ひとりひとりの“今”や個性を大切に日々の状況を適切に記録し、職員間で情報を共有した上でケアに活かしているほか、小さな気づき等についても記録し、申し送りを徹底し、ケアの実践や介護計画に反映させるようにしている。		

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28	○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	従来のサービスの枠にとらわれず、利用者ひとりひとりの状況やニーズに応じた、柔軟なサービス提供に取り組んでいる。また、オリンピア兵庫として、デイサービス・ショートステイとを組み合わせ、小規模多機能ケアに取り組んでいる。		
29	○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	オリンピア兵庫の存在する地域において、商店街や老人会等と協力し、地域資源を把握するとともに、利用者ひとりひとりの地域生活の支援のために、地域のもつ力を活用している。		
30	(14) ○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	協力医療機関または希望する医療機関のかかりつけ医を選定し、受診できるように支援している。また、かかりつけ医は定期的に往診をし、利用者の健康状態、ご本人・ご家族の希望を把握しているほか、心配事がある場合にはその都度相談や受診ができる態勢を整えている。	協力医療機関又は希望するかかりつけ医への受診ができるように支援している。協力医療機関からの往診(内科・外科)がある。デイサービス・ショートステイには看護師が配置されておりいつでも相談できる体制が整えられている。医師の往診時にも看護師が付き添っており、医療的な連携を図り易いように体制が整えられている。入居者の些細な変化を見逃さないように観察に努めており、観察・発見された変化は医師・看護師に速やかに相談し、入居者の疾患・健康の管理が徹底して行われている。	
31	○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職は、日常的にオリンピア兵庫の看護師と緊密な情報交換を行っている。体調が悪化したときや急変時等は、小さなことであっても、看護師が対応したり、相談に乗ったりしている。		

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32	(15) ○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者が入院した際には、スタッフが毎日のお見舞いに行き、現状をスタッフで把握するほか、オリンピア兵庫と病院の医師、看護師、地域連携室、家族等が情報交換を行い、早期に退院できるように支援している。また、日頃から協力医療機関と情報交換を行ったり、利用者の入院時にはスタッフや利用者が見舞いに訪れたりしている。	現在入院中の利用者はいない。入院が必要な場合には、かかりつけ医へ相談するようにしている。利用開始時には利用者・家族にかかりつけ医の確認をすると共に入院が必要な場合の希望の医療機関を確認している。入院中は入院先に職員が面会に行き、状態の把握に努めている。退院時には速やかに元の生活に戻ることができるように支援・対応を行っている。	
33	(16) ○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所であることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合の対応に関して、入居時に方針を確認するとともに、その後も状態の変化に応じて随時、本人・家族と館長・管理者・スタッフ等が話し合う場を設けている。終末期にはかかりつけ医等の関係者とともチームで積極的にターミナルケアに取り組んでいる。	重度化した場合の対応に関して利用開始時より方針を説明、意向を確認すると共に、状態の変化に応じて話し合いを行い入居者・家族の意向に沿った支援を行えるようにしている。終末期には、入居者・家族の意向を確認すると共にかかりつけ医や関係者、職員で話し合い統一した支援を行うように取り組んでいる。看取りを行った後に全職員対象に「偲びのカンファレンス評価基準」で故人を偲び振り返り評価を行うことで今後のケアのあり方につなげるように取り組んでいる。	
34	○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	スタッフが緊急事態に対応できるように、市民救命士講習等外部研修に参加したり、内部研修を定期的開催したりしている。また、利用者への個々の対応に関しては、普段よりユニットで想定される事態をシミュレーションしている。		

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(17)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	非常災害時への対応についてスタッフが定期的に研修を受講するほか、年に2回、昼間想定・夜間想定消防避難訓練を実施している。また、地域の消防署・交番等とも日常的に情報交換を行い、緊急時への備えを行っている。	年2回の消防署来訪で避難誘導訓練の実施を行っている。避難訓練・消火訓練を入居者も参加し実施している。地域との協力体制も整備している。	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(18)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	「オリンピア兵庫3つの約束」として、スタッフは利用者に敬意を持ってお話しをすることを徹底している。また、日々の生活の中でも、「誇りを持ったこれまで通りの生活を送るお手伝い」の理念の実践に努めている。さらに、ひとりひとりの関わりが全体に及ぼす影響についても、常に確認を行っている。	オリンピア兵庫の3つの約束からスタッフは入居者の尊厳・誇りやプライバシーを大切にしたいケアやことばかけを常に行えるように考え、意識して行うように努めている。日々の生活の中で入居者の尊厳を大切にできる限り自己決定できるように支援している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者の自己決定を引き出す声かけを行い、ひとりひとりの思いや希望を引き出すよう努力している。また、その思いや希望は、たとえ困難なことであっても、実現できるようにチャレンジしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	「生活の主人公は利用者本人である」という理念のもと、利用者ひとりひとりの生活のリズムやペースを大切にした支援を行っている。職員は、利用者の日々の希望を引き出すよう、取り組んでいる。		

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39			○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	利用者ひとりひとりの「その人らしさ」を引き出す服装や身だしなみができるように支援している。また、利用者ご本人が服を買いに行く機会を設けたり、玄関に鏡を置くなど、日々の生活の中におしゃれを取り入れる支援をしている。		
40	(19)		○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	「食事は人の心が最も開く時間」と捉え、利用者もスタッフもゆったりと食事の時間をたのむことができるよう、器や盛りつけ方にいたるまで工夫をしている。準備や後片付けについても、ひとりひとりの持てる能力を引き出し、積極的に参加してもらおうようにしている。	ユニット毎に入居者と共に調理している。入居者の嚥下や咀嚼に応じて刻みやミキサーにして、入居者の状況に合わせて食べやすいように配慮して提供している。摂取量が減った時には、入居者が食べやすく好んで食べる甘めの物等を試して摂取を促すようにし、十分に摂取が進まない場合にのみ補助食の導入を検討している。水分摂取を十分にできるように支援し脱水予防を図っている。食事時間は入居者と職員と一緒に食事を味わいながら入居者にとって食事が楽しいものになるように努めている。	
41			○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事のメニューは館長や栄養士が常にチェックを行い、栄養面だけでなく季節の旬の食材を使うことや、彩りにも細心の注意を図っている。また、スタッフが一緒に食事をし、ひとりひとりの摂取量を把握しているほか、状況の変化に応じて専門職と協働して対応している。		
42			○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	ひとりひとりの口腔内の状態や、能力に応じた口腔ケアを実施している。また、協力医療機関の歯科医院からも定期的に検診に来てもらい、専門的な立場からのアドバイスをもらってケアに活かしている。		

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(20)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	ひとりひとりの排泄の状況、能力を把握し、可能な限り自立して排泄できるような支援を行っている。また、おむつメーカーと協働し、専門的な立場からのアドバイスをもらうことにより、ひとりひとりの排泄環境の向上にも日々努めている。	排泄チェック表で一人ひとりの排泄状況を把握し、自立した排泄が行えるように支援している。入居者の表情を見て排泄の意向を把握し支援するように取り組み、トイレでの排泄ができるように支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	オリンピア兵庫の看護師・栄養士の協力を得て、食事のメニューの工夫や適切な水分補給を行うことにより、便秘を予防する取り組みを行っている。また、利用者ひとりひとりの能力に応じ、積極的に運動してもらえよう、支援している。		
45	(21)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	職員の都合ではなく、朝・昼・夜を問わず、利用者の希望するタイミングで、満足できるように入浴してもらえるよう支援をしている。あまり入浴を好まない利用者についても、声かけや入浴時に音楽をかける工夫によって、期間が空きすぎないように取り組んでいる。	入居者の希望や状況に合わせて入浴ができるように支援している。入浴拒否傾向にある方でも気持ち良く入浴してもらえるように、声かけや日時を替え支援し入浴してもらっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	定時就寝・定時起床ではなく、利用者ひとりひとりの生活のリズムやその日の状況に応じて、安心して寝てもらえるようにしている。必要であれば、食事の時間を調整するなど、安眠のための支援を行っている。		

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47			○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員ひとりひとりが確実に薬の目的や用法を理解し、適切な服薬の援助ができるように、日々情報の共有を行っている。特に、新しい薬が処方されたり、薬が変更された場合、確実に申し送りを行い、誤薬等の事故の防止に努めている。		
48			○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者ひとりひとりが責任や役割をもって日々の生活を送ることができるように、個人史等も活用しながら、支援を行っている。また、嗜好品をこれまで通りに楽しむお手伝いをするほか、常に新しいことにチャレンジし、毎日たのしみがあるようなケアを心がけている。		
49	(22)		○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	利用者ひとりひとりの希望や気分に応じて、気軽に外出できるように支援を行っている。普段行けないような場所でも、家族との協力のもと、ハワイ旅行・淡路島旅行・六甲山旅行等、これまでも本人の希望を数多く実現させている。	テレビ等を見て入居者が行きたいと言われた場所にも個別で外出できるように支援している。家族の理解と協力を得て、USJや京都、奈良など旅行にも出かける機会を持っている。花見など大人数で出掛ける機会もあれば、少人数で入居者の希望に合わせて外出・旅行に出かける機会も多く持てるように支援している。入居者の馴染みの場所や懐かしい場所への外出や旅行なども個別の支援を行っている。	
50			○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者が自分の思いによってお金を使うことができるように、それぞれの能力に応じた支援を行っている。また、Cafe Olympiaや、地域の商店や祭りへの外出など、お金を使う機会も積極的に提供している。		

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51			○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者が家族や友人に気軽に電話をしたり、季節の手紙やハガキをやりとりしたりできるように、支援をしている。絵手紙に挑戦したり、海外で暮らす家族に手紙を送ったりと、その取り組みは広がりを見せている。		
52	(23)		○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	オリンピア兵庫は人間科学の研究に基づいて設計されており、高齢で認知症の利用者が「暮らしやすい」空間づくりへの配慮が徹底されている。また、各ユニットをひとつの「家」として捉え、それぞれの利用者・スタッフの望む生活感や季節感を取り入れるようにしている。	家庭的な雰囲気フロアは入居者の方がゆったりと過ごすことができるよう環境づくりに努めている。入居者がソファやテーブルで、一人でゆっくりと過ごしたり、複数の入居者が自由に寛げたりする居場所が作られている。入居者は自由に各ユニットを歩き来して、閉塞間の無い生活を送る事が出来ている。生活感が感じられる対面式のキッチンから入居者の様子が一望でき、見守りと事故予防が可能である。	
53			○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ひとりで座れる椅子、2人で落ち着けるソファ、3人で話ができるテーブルセットなど、そのときどきの人間関係も考慮して、たくさんの居場所を提供している。また、「死角」も積極的に活用し、安心して過ごすことのできる居場所づくりに取り組んでいる。		



自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(24)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	「その人らしさが伝わる部屋」を目標に、使い慣れた家具、思い出の写真や品々、そして好きな物に囲まれた居室づくりを、利用者ひとりひとりの思いにあわせて行っている。家族の協力も大きな力となっている。	居室は他の入居者の気配を感じながら、思い思いの時間を過ごせるよう配慮されている。室内には、家族の写真や手作りの作品などを飾り、入居者のなじみの品や思い出のものを持ち込まれ、個性豊かな部屋作りができており、その人らしく安心して過ごされている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	オリンピア兵庫では、手すりを限定された場所にのみ設置したり、不必要なサインは設置しないなど、安全に配慮した上でできるだけ自立した生活を送ることができるように工夫をしている。		